

K3.22:2

272

Supplement
New Year's, n.d.

67/14
C

TRANSLATION OF
TABLE OF CONTENTS:

GILA NEWS COURIER

New Year's Supplement

<u>" Cactus "</u>	Page
New Year's Message by Robert H. Baron Project Reports Division	
Greetings to Special Editor of Literature by L. T. Hoffman Community Service Dept.	1
Memory of Santa Anita by Tsuyuji Takeda	2
Sorrowful History (poem on Santa Anita) by Gincho Sakurai	4
Poems of Gila Poetry Club Members	7
Eragment of Center Life by Toshio Kinoshita	11
Tendencies in Poetry by Shiyoshi Yanase	15
Poem and Samisen (Japanese Musical Instrument) by Musei Tani	21
Verses: Members of Gila Poetry Club selected by Gincho Sakurai	26
People Who Are Moving by Shigeru Jo	34
Poetical Works	10, 14, 25, 33, 37
Words from Editor	43

仙

仙

此景照錄一九四三年新年附錄
「文藝特輯」號

霸

王

樹



K15.00

GILA NEWS COURIER
RIVERS, ARIZONA
JAPANESE SECTION



NEW YEAR'S SUPPLEMENT

5878



比良時報一九四三年
新年附録文藝特輯號

目次

年頭之辭

(小笠原謙三)

文藝特輯號に寄す

(武田露二)

サンタ・アニタ拾遺

(櫻井銀鳥)

悲しき史

(木下郁志文)

字守之小

比良歌友会
詠草

收容所生活断片

(川柳乃勤向)

川柳乃勤向

(川柳乃勤向)

川柳乃勤向

(川柳乃勤向)

比良歌友会

詠草集 (詠草選)

移り行く人々

(城ヶ崎)

短歌集

一〇 十四 廿三 廿七

廿五

詩

(時彦)

六

巻頭言

編輯を終へて

(小笠原謙三)

K15.00 G/L4

此の冊子の名称は設書に依つて比良山人民の創意を採つたもので『覇王樹』とはウクタスの別名であり、沙漠の愛嬌ものであります。

又編輯上 櫻井銀鳥 武田露二 谷無聲 藤重鯉 城江上初枝 佐藤一棒 の諸氏から多くの協力と助言とを得たことを深謝します。

千九百四十三年一月一日刊行

"Gila News Courier"

發行所 比良時報社

Gila Relocation Center W. R. H.
Rivers, Arizona

編輯を終へて

特輯號の編輯を終へた私は今溜息許りついて居る。

餘りにも多くの玉稿を戴いて其採扱には全く途方に暮れてしまつた、何れもお立派な作品揃ひで、何遍繰返して読んでも感心するのみで、何時経つても整理がつかない。

一層のことサイコロでも振つてやらうかとも思つたが、遂に涙を呑んで、僭越乍ら私の觀方ではこれ丈けのものを残した。勿論私の標準なるものは至つて怪しいものであつて、後日嵐のやうな批難を蒙るかも知れないが、何とて一升の袋に二升の酒は盛りやうはなく、只編輯者の苦勞のどんなに大きいものかを知る方だけは許して下さるに違ひない。必らず第二輯を出して掲載された作品を發表し、お詫びに代へるつもりである。

卷頭言

私は嘗て、ゴッホの「私の室」と云ふ繪を見た事を思ひ出す。その繪は、彼が一脚づきの机と椅子と、寝台との外には何一つない様な、殺風景な部屋から、どんなにか美しきと見え出し、幸福を感じてゐるか、よく窺はれるやうなものであつた。

今私達の置かれて居る環境は、自由のない万事不如意に至つて悲惨なものである。だが一見この不自由な生活の只中からでも、私達は最も新しいそして無限に複雑な神経と理性とを必要とするやうな生活を打樹て、行か度いものだと思ふ。

比良轉住所内の日本人諸君！



年頭之辭

情報部長

Robert W. Ballou

先づ以て年頭の御祝辭を述べ、併せて皆様の健康と幸福とを祈る所の私の真情を披瀝し度い。

諸君は今、開闢以來嘗て無き状態下置かれ、餘儀なく政府の保護によつて、安寧と秩序ある、而も許す限りの民主的自由の生活を営みつゝあるのであるが、我々R.W.當局では、常に諸君の爲めに慰安と文化的向上とを目指し、苟もその機會の逸することなきを期して居る次第である。



五十鈴

岩山小立らけあうまもい手かざし
土人乃長は昔徳比ぬ

古くマサノ

夏もやしも何時かを晴るはふぬ
うく捨く生れなん同記

追々美海子

とくくろ思ひふやあま計運ふ
晩秋の根更きわ肌をきくわ

中島教二郎

がらくふふふふふふふふふふ

這いふらふわふ目しうううう

赤村

我れはふふふふふふふふふふ

心静ふふふふふふ



アイオンワッド

照子

握りにけりし曉乃

セイジの原にけりし人影

時彦

あかき夜を灯りてさるるスホル

クックもか人知るる晴れり

佛の悟

秋はゆき吹く風をい比良の里

聖山をいそぎて斗にきく

南岳

風もあき吹く風の乃をさるるに

沙溪のき乃にゆきもえに

浮城

秋をきり吹く風をいさるる

聖山をいそぎて斗にきく

就中、民衆の総意を尊重して、公平と眞実とに基づき善良
温順なる諸君の積極的活動を支持し、奉仕精神より遂に所
の輿論反映の府たる唯一の報道陣たる比良時報に對して、
自分は極めて力痛を入れるものである事を告げる。

今新任勿々、いかも縁喜のよい年頭の辞を比良時報文藝
特輯號に寄するに際し、諸君と俱に今一つの欣快を領つて
のたふことを申し上げる。即ち當該住所長ベネット氏が極めて
理解に富む邦語版増大、拡充の承認確約である。

斯かる上は、先づ必要に順應する人材を得ること、然る

後、両館府に對し融和公平協力以て常に餘裕あり強靱な
奉仕達成を期待するものである。而も諸君の權利擁護に関
する如何なる問題も之に依て極めて円満に解決するやう進
んで貰ひ度い。最後に繰返し今一度お正月の言祝ぎと各家
庭への平和と栄光、比良時報の健闘發展の齎らされん事を
祈りて止まぬ。



文藝特輯號へ寄す

社會奉仕部長

いん けん せい ぶ ちょう

諸君が比良轉住所に入來ると同時に、先づ經驗され
た事は、様々^{さまざま}に勝手放題なる批評、不満等々に依つて
表明された。凡そ讃詞の少ない種々なる事象であつた。
之も一應尤もな事、今迄絶えて經驗のない社會環境から
突然、世記の歴史的な生涯へ飛込されたからであらう。
亦来、諸君は持前の精神と努力により、今や當に僅々
数ヶ月を閲せるのみなるに拘らず、永年の土着者其のも
のと俤はす程の姿態を認め得るのである。



藤重鯉城

他住居心にむきありあけの
比良の沙漠に照る月を愛で

竹子

朝夕を祈る心のひと筋に
正しき人となれよ吾が子よ

神垣三重子

生きなんと欲する蠅のいどろく
集ひより来る日射す窓辺に

南方房子

朝夕に冷えまきり来ぬ此頃は
あつき布団のあちこちに見ゆ

アリソチの沙漠の中に咲き競ふ
色とりぐの歌の花哉

内本星花



俊 嶺

路を行く人の日傘に秋の陽の
色霽はしくかゞやき映る

珠 樓

隔たれる空に眺むるこの月残
ふる里の母は如何に見るらん

後藤 一子

はらくと散る木の葉とてな比良の
配所の 秋は淋しかりけり

鈴木 冬人

比良の朝風は身に沁み冷ゆれども
晝は小春の心地よきかな

比良 女どり

とうはれの 汝ぞと吾に強ふるごと
安きびーきサボテンの山

斯かる折に、當然叫ばれるものは、冥想と思索、希望とより送り出る、止むにやまれぬ文藝情緒である。

最近、図書館に於ける好成績に徴するも明瞭と思ふ。

其の称讃と驚歎措く能はせ喜ばしき例證を示せば、眞面目で有用な科学書類、美術書、古典文学、詩歌小説類等々の近刊と其の読破数の累進計統である。

宜なる哉、斯かる要望に対する代表的現れとも云ふべき企は此『文藝時報』である。この發刊こそは、誠に時機を得たよき活動である。

私は確信する。之によつて、從來比良ニユースが物資の不足より生ずる不平も憾みも一時に解消し、同時に、無二の重大使命を有つ比良時報が、幾百の論說、諧謔、混合文藝等も、恐らく此一輯に映る眞の叫び、偽りをなす文学精神の齟齬す效果には及ぶまいとさへ期待する處である。

最後に只管希望するものは、文藝精進の力が一同によき
自重、覚醒、慰安、導導と疎らせん事である。

サンクニタ拾遺

武田露二

市民非市民のけぢめ問はずは昨日にて

繋がる血ゆえともに来りぬ

あてがはるゝものを食うべて目送りす

安き日頃といけいふべし

飢えざるをまつしあけせとしりぞきて

多く恃すぬ 寂しさに居り

幼な児の口にふさはぬ食多し 月をくらげたりて

瘦せ細らせぬ



宮崎南浦

季節とはて試み鮮くも延びし蔓
主にはくゑむ白鹿の花

中西夏江

静かなる夕べの空に眺めつゝ

父母戀しうと思ふ假位

岡田あけ子

有難さみ教うけに子等皆は

集の睦みぬせまき御堂に

静瀬

仰る見る主にしたのめは少いだに

我が弱きとばおそれるけり

寺西あけ子

まゝに、もゝ欲しい物あらは送らむと

別れ住む子の便りうれしむ



川の市マナ短歌集

井上より子

サホテンのなみだふ岩山色きびで
あはれ今年の秋もいぬあり

神垣かお子

母親も少女の昔にたちかへり
学びの庭にはけむこの頃

川迦弥新

みまかりし人の家の扉は秋朝に
冷えくとかたくなき居たり

沙茶洲

冴え渡る比良の沙漠の夜の空
冷えくとして星のまたく



悲しき史

アニタの俳句

櫻井銀鳥

芝青きアニタ悲しき史となりぬ

(山晴風)

之は未完成の句であるが、その故に捨て去るにのびないものがある。

彼の病院前の目にーみるばかりに青い芝生に向つて、作者はあふれ出る涙を如何ともすることが出来なかつた。誠にエヴァキエトの歴史は哀しい。個々の例を取り上げる迄もなく、多感なこの若者の心のたぎりのみで、もう明かである。

慟哭の詩人山晴風君は又

春の夜の探照燈に見守られ

とも詠んでゐる。後句に見る心のゆとりがあつて、初めて前句の激しさが生きてくるのではないかと思ふ。

午後晴れて白靴履いてに、会に

(飛朗子)

芝青きの深刻に比して、白靴は軽快だ。アニタの午前は曇り勝ちで、ウィルソンの銀塔が晴ればれと望まれる朝はそう多くはなかつた。重苦しい霧がうすれ初めると、もうデイナータイムに近い。御飯をそこくすまいて、着物を変へ、面会所へ急ぐ青年達の心は軽い。はるくと訪ねて来てくれた友人知己を通じて、アラトサイドの空氣に觸れることが僅かに彼等に許された自由とも云へるので、面会を終へて、雨の手に大きな包を抱へて歸える彼等の顔は午後の明るい日射を受けて紅いばかりである。

自分にも信ぜられなく、怠るやうな目を自分に向けて口を開けてゐる次男の顔を見ると、理由もなく、腹が立つて仕方がない。

汽車は熱砂の野を進み進んで、ソルトン湖も通り、ブローレーも通つたが最早窓をあけて見る元気もをかつた。

湖だ、湖が見へた。誰か二三立つたが直ぐに力なく座つてしまつた様だ。やがて足下の車輪の音が一きわ高くなつたと思ふと、コロラド河上に徐行しつゝあつた。

鯉が居る。風が涼しい。樹が青い。色々の声が車内に溢れて来た。憎い汽車は橋上には止らずに、アリゾナ側の焼けつくユマの町に入つてしまつた。

乗車以来、第二夜をユマで迎へた数々の汽車は、星空と、端ない沙漠の中を、最後の力を出して、走るのであつた。

打撃と受けてゐないのか、それとも連日見る奥地送りの日本人に倦いてゐるのか知らない。

ロスアンゼルスを後にして帝京に向ふ道で再びカクタスの山野に立つのを見る。昨夏、此辺を自動車を通つて見た巨人カクタスは、一種の慰安でさへあつた。今汽車の窓から見ると、我々を嚇かす様に、惡く想像すれば、十字架の如く、或は墓標の如くに、点々として立つてゐるのであつた。

此の辺に來ると、車内は地獄の暑さだ。窓を開けると外の熱風が入つて來て更に暑くなる。彼方北方の人々はまるで死んでゐるかの様だ。奥地行きも、暑さも、呪ふ元氣を失つて、只だ鉄輪が、ゴトゴト御音くだけである。今にソルトン湖に出たらキツト嬉しくなるよ、子供や、近くの人々に出つた。將して涼風が入つて來るかどうか

山崎風君と飛朗子君はキヤムプ入するまで面晤の機会がなかつたが、一日私の紹介で握手するや否や忽ち十年の知己になつてしまつた。

好事魔多しか、飛朗子君は十月十九日にコロラド州のグラナタへ、山崎風君は一日後れて、アーカンソー、州ローローへと、別れを惜んで旅立つてしまつた。其の後の様子私は知らない。手紙で句を見せ合つて、アニタは居た頃と変らぬ友情を示してゐることゝ信じる。

詩

口笛

時彦

心寂しうて口笛吹けは

宵の空氣が微に夜長ふ

君が戀しと思ひはせぬが

何か今宵は寂うてなまらぬ

國を離れて異國の空で

吹けば口笛いつとはなほに

君に習つた旅愁の小唄

いつも寂しい口吟み

少健とに比良歌を詠草

我 みを

ゆゝしげに探照柱立ちぬれ立ちぬ幼き
子等の戯れ遊ぶ小

あつきの月おは残り朝餉路人影の動き
まはら小遠

関 枝 折

塙一がくに暑きつふやく陽の感^{あつき}粗材の
樹脂はい遅れて匂ふ
共に住む事あらけり^{あつき}粗材の
灯^{あつき}ももさへをば^{あつき}粗材の

松平 健吾

バラックに雲も定まり更けし夜を寝がた
くたれが雲が青淵中



移り行く人々

城へける

前夜乗って以来、半世紀も前の遺物の様な、甚だスプリング性の乏しい我々の汽車は、貨物列車の驚進のやうに野を駆け、山を喘ぎ走るので、乗物に縁遠くをつてゐる我々はまるで桶の中の芋同様であつた。

夜が明けそめてから、昨夜のあばれに疲れた様に、静かに走る様になつた。ベーカーズフィールドの連峯を後に、下りに向つてゐたのである。

見渡す限りカクタスとセーザブラシユのモハビ沙漠は、我々の行く永住地を想はす如くに北に拓がつてゐる。汽車は此の不運な日本人達を乗せてロスアンデルスに着いた。日本人満員の汽車を眺めても、外人等は別に何の感じもない様である。彼等はまた、戦争そのもの、直接

山の市^{マキ}

短歌雜詠

造花部

志外

砂原と云ひは誰ぞこゝに――て培はて

咲く花はさ――

夕づきしセイダの原は越え牛きけ秋更け

志比良の風は身に沁む

中原を代

アリゾナの沙漠の中に花もありて暮れ草木

まゝあむきやう家と思ふ

日米結き付の断たれて大洋^{おほわた}の底にまに

くに一年は経ぬ

花鏡も押さへられしもの出来どくてもなまじし
にしも何ふ心地す

瑞生候子

北斗星とみたりつていふ吾が影を砂原まで
是よりわざや——

以つて日にまゐるえむ^{まち}宿^{まど}府^ふぞ^{まど}平^{まち}急^{まど}越^{まど}一の
市^{まち}船^{ふね}空^{そら}に月^{つき}蝕^く満^{まん}——

遠山かすみ

何時の昔よりかくてありきむ山裾の白き
小^こ石^{いし}に指^さす^さてくる

帰^{かへ}る路^{みち}小^こふと見えはれず果^はてたこなき沙漠
の中^{なか}の細^こき一^{ひと}つ町^{まち}

⑤ 園

河^か沿^えひにまじふ土^ど堀^{ほり}の家^{いえ}低^ひくこに久^く
きインデアン^{インディアン}の村^{むら}か

後記

アイオンツリーの細工に同胞ら餘念なく
かくて在りなむことなきが如し。

サンタニク拾遺 武田露二

食あたり／＼に／＼てあなあはハ味覚
神経のいたき尖りを

飢えずあればまづ是ろゝらし口に適ふあ
はぬの言^{せん}はつゝゝむとせむ

外部にゐた頃吾々仲間のもの、間に『とつくに』といふ

機関雑誌があつて隔月に歌を発表してゐた。

たま／＼再会の機運に恵まれ話けおのづからこゝで歌
会でも始めてけといふやうに進み生れたのが『やほくに
比良歌友会』である。

迎り来り沙漠の月の青かつし
 カクタスのひとつくの冬夜
 生馬くやさげく原の夕月夜
 蔭膳を供へて母子や感謝祭
 大根を祭りてわれも果てかな
 我等こゝに戦に遠く志満祭
 岩山ひびく讃美歌感涙祭
 真直ぐなヒラの大根貫ひけり
 干大根故園あきて此の里
 燕泣ふキヤンの水更や幾度も
 月明く心平かなしらぬ夜も
 望月夜兵下り立ちて汽車と渡り
 木葉いのよらほひけり懐きふる
 白人小窓へ目を振りけり旅

送者

杉井浪鳥

急女

平賀 静村

山幸

島枝

板橋 光子

貞庵 舎人

菊出

永田 雄歩

河合 志外

杉本茶々松

夕雲乃色眼をけり
秋の川

朝寢や日隔りのあふ白き壁

秋の降るおきよりや比良の雪

あはすむくのや天の川

新嘉坡山に於て

朝寒やまじいらくのそく金

影をよもつて
掃子部室の隅

小句人の集ひて移の夜の静か

栗鼠遊ぶ木の下や箱はこをす

羅奇達一三二五

キヤム
テ
淋
一
萬
餘
に
及
び
て
居
る

旧反と字きぬ
詰や元は
列

天の川石ころ山より来る

寺山 馳こ我等に成るの天の川

宇都宮 義

小卷五

范田
王有令

北島
紋子

卷之四

軍養架

金親化石

伊藤いさ子

孫步

久保田緑洲

四 村秀 示

名称は何でも介はない訳であるが、過去を偲ぶお互の
気持ちの表れが期せずして一致を見られ、中も深くに心と名付
ける事になった。

同好の方々の参加はもとより望む所で既知未知を問は
ず歌に對して誠意と熱意をお持ちの方け御遠慮なく加
つて頂きたい。歌合は今後月一回乃至二回持廻りの筈。

山の市短歌雜詠

やぐみ

○荒れはる〜沙漠とのみに思ひしを黄に咲きて

かな
憂しセイジの花

○朝や夕の白にいく食の種や〜どのやぐみ
忠いついぞやぐみ

○ひんがしの吟滅燈はけおきし立れまらみぬ

あかねに照らす



收容所生活断片

都詩夫

○見張塔の窓白々と凍りけり

二月二十六日の朝、物々しい敬言戒裡に私達はビイ收容所に容れられた。庭には未だ所々残雪が凍って居た。寒さで震えた、でも日が経つに連れ、心持も落付き、又室内の防寒設備も整つて居たので、豫期して居た程の寒さを感じなくなつた。只窓からたまに外を見ると、金鋼外の見張塔の窓が白々と凍り付いて、身内をぞつと寒さが走つた。

○たんぽぽの美しさ知る收容所

北國の四月は曇日が続いて、肌寒い感じがする。木の葉も冬眠を貪つて居る。庭には勿論花が咲いて居ない、實に荒涼たる風景だ。そんな時に、雑草の中でたんぽぽを

為造花あしらふスや感謝祭

ローンは未だ生えて冬陽や干大根

霏風ハ比良のキャンプに着きにけり

移り来て比良の濁江鯉釣る

銀漢や堀を境の收容所

霏風の風がたるあとの天の川

湯帰りの人歌ひゆく天の川

天の川四方のホホ林寂しくして

寝るゝの湯元を食うたのゝ寝

インデアン村を尋ねん感無量

女王ありニき思へく大根系

流星やさぼるゝ山の砂外劇

鈴寒や山の風ふり塵捨て場

によづほりとまゐる石山影を

佐藤一棒

横山三系

大坪ふ己

波達子

こゝにきて棉摘むこゝにも覺えし娘

山中 耿城

棉摘むや比良乃山並大らうの小

一ト通り家具も出まらうをぬけつ

野きの棉摘み此顔振ひき索

支人様のは良乃秋空 音高に

銀漢やきらめき文すビイコン 燈

館内日々整ひゆきて感謝祭

ホウ留ふわれに月缺げ又満つる

旅立つやサンタアニタけ動日和

アリゾナの石ころ山を出つる月

秋目さすニューバックスの影掃除

高原を翔ける鴉や秋の影

沙漠暑く手をあげ合ふて人と人

音の蜻蛉逃げて紋け澄む

林 齊

田中てる子

吉良比呂武

見つけた。なんと可愛いく、美しいことか！

家からの便りには、色とりどりのチューリップが今を盛りと咲き誇つてゐると書いて来た。去年の暮れ私が買つて来て植えたチューリップだ。細瀾と咲けば咲く程主人居なき家の者どもは淋しからう。花の便りは私に御愁を起させた。ほんとにカリフォルニアは今春だ。だが此處では、外の風景も、私の心も冬だ。

こんな時、こんな所での一輪のたんぽぽの花である。それは寧ろ魂の花である。眞の花である。私はビイ收容所のたんぽぽの花の美しさを終生忘れないであらう。

I found the beauty of Transjordan

Because There are no other flowers

In the desert Camp

詩句と英訳すると、どうも説明に流れ勝ちで、本當の

味が出ない。どうも語学不足だけではない様を気がする。

○收容所の隣りの畠は小麦畠日廻草の交り咲けり

私のバラツクの前は、道一つ隔て、大きな小麦畠であつた
春といつても、實は初夏であるが、畠にたいデスケを掛
けただけで種を蒔いた小麦畠だ。あれで小麦が收穫出来る
ものをら。こんを安易な百姓はない。とよく皆で話し合つ
たものだ。その小麦が浸々と伸び、實り、何百町がみな、
黄金の海と化した。その黄金の海の中の所々に、日廻草が
あちこちに睥睨して、珍しげに咲いて居た。

○珍らしい石数多あり石拾ふ人数多あり收容所の朝

收容所では何百人といふ人が石拾ひに熱中した。カマ
ニアだ。珍石や寶石を採るため、土を掘る者、地を通ふ
者、靴で穴をあける者等々、實は珍風景である。
其の石をまた丹念に磨くのだ。お上り給ひ、毛布や、

十字架に「ゆるカクタス秋の山
此の山のサボテンばかり秋の暮
秋晴しの空にヒラの鬼の飛ぶはり
幾年を比良に暮さん 秋の月
語りつゝシャワ出る人に銀河濃
本の珠を肩に 沙漠の秋の暮
かくて今ヒラの空を天の川
面瘦せし 鏡のわれに影を
丘の上に揺れるタシクタ雪ふ
バラックの間の小つむぎ 枝崎さ
比良の月風船の如かゝりけり
インデアン瘦馬飛ばす 秋高
夕焼やアリソナ色の比良の秋
秋雨や泥氷落す比良の屋根

福山 英春

山中 惺汀

江崎 あらた

新雪や分よ 銀河の瞬き
アリソナの水河の山や秋の風
遠山の波方は加勢 秋の空
新雪やウエトレスは背丸の
ろうそくの灯影にぞひ天の川
休哉日 甕の中を行進す
月ぬ仰き星を仰ぎて 寂寥を
立ち出でてセイヂの原の秋の暮
川沿ひの土人の邑や波り鳥
ヒラ沙漠開墾いて 白く大根引
新雪や忽ち終る 血洗ひ
雪ハ立つヒラの 岩山 稲花リ
アリソナの星の教々天の川
朝寒や日課となりて 庭掃除

彼々木一風

山中利子

山田 嵐何

山中 澄恵

園に穴があく程石を擦つて居る。其の石を台に乗せ、右から左から、斜から、脊仰バして見、屈んで眺めては悦に入つて居る。なんといふ無邪氣な風景であらう。石はすべての苦勞を盡してせた。石は道を、神経衰弱から救つて呉れた。

山の市ツキ短集雜詠

渡邊

天狗

家あまた草花の種蒔きたれば水やうと子
等の樂し又騒ぐ

霜月の暮れゆく空にひびいて鉄樹切の
人々鋸の音高し

石の半ばに眠り出つるときは比良の便り
は信ぜられしと



川柳の動向

葉山 子

川柳の起原とか其變遷とか云つたことは今さら述べて居る機会を與へられないうゝ。これから川柳の圈内に入つて、作句でもして見たいと云ふ人々には一寸縁のないうゝになるから省略する。川柳と云へば、あゝあれかと云つて、大抵の人々は知つて居る。なる程一般的を平民文学である。

文筆でもとれる人々だつたら、どれ俺もやつて見やうかと気軽に考へて居る位に誰にでも入り易いけれども、その割合に進歩はおそい。柳人界でも川柳とは漫画など^{出て}にゐるのが川柳だと思つて、それに固執して居る人々が沢山ある。それは川柳の側面を知つて全面を知らないうちである。それでいざとなつて川柳おと、抗議を中込む人もあらう。そして自分はいふ度い。この世の中は諸行無常である。

比良吟社俳句集

櫻井銀鳥選

ほこりを捲いて行く風も秋のふり

奥登吼堂主

月の大きくカクタスの影黒うそく

秋の谷の穀穂の輝合が次第に高く

天の川流氷をてゆく頃

名月やすくく〜と大仙人掌

兼服志一

素晴〜きヒラの夕焼一寸の眉

賑う小ヒラの星空 銀漢も

秋夜や 誰もが同ド支那服

星月夜 ユマも呼ぶる町につく

池田依保子

夕焼のきく〜 柳島

秋夜や 背がもろく農夫達

ふりかける銀河を仰ぎ傷きり

磯節や、さうさ節位なら唄ったり強り相を御客へ、
柳白つた奴を並べますと、

○前髪の ふけを揺いてる燈の光 (文政)

○吹殻を 清いなと微の尻で つま (昭和)

○三味線へ 耳打ちに来る金下子

○良い客を三の絲程 あふながり

○汽鐘まは 二人居るとは思はれず (安永)

末句は喧嘩ものすんですが何かーらの情景が便(は)

満更でも ありますまい。

紙面、都合があるが、此の辺で御散りませう。とに

て御希望と あら、は次回に稿を續けませう。(ん)

杏村

昇る陽に居るをともく、
假座の軒の細き小松



讀む。行が常でないのだから変化しつゝあるものだ。

川柳も亦この仲間で分け合ふことは出来ない。

川柳は此の毒の中に現れたのは、徳川三百年の末端で、
其の腐敗の社会は、といへば予戦は袋に、刀槍は鞘に、と
云つた其今で、上下登つて遊蕩三昧に耽り酒肉財の間に
彷徨してゐた時代だから、川柳も亦その時、葉の相手に
利用されたのも無理はない。ことに此の頃は生活上は餘
裕もあり、文學的に之を汲ふ人等がある筈がなく、遂に狂
句と云ふ無体鬼が生れて来る様になつた。それから時代は
刻々と變化し、神代は退き、王政は復古し、維新の大業
は成就した。が、その間に丁酉の乱や、日清戦争の如きが起
つたりして、又、^字右面は運々の感があつた。

従つて川柳も亦下積みになつて、かゝるもの、存在とさ
へ認められなかつた。けれども特志の人々もあつて、この

道に研鑽の勞を惜んでは居なかつたのであつた。

果然、明治三十六年日刊「日本の記者」であつた故井上劍花坊氏が、自己の新聞を背景として、川柳に対する第一声を挙げた。これと相前後して、なにか横浜であつた阪井久良岐師も亦川柳に就て民衆に呼掛けられた。それからずつと

おくれて、これも牛込であつたか窪田而笑子師が川柳界に足を突込んだのも此時であつた。多少をりとも川柳の何たるかを解し得るに至つたのも、恩師^敬松檮寺井上劍花坊宗匠の賜である。自分は此の際全師の恩義と感謝し、同時に同師の冥福を祈りたい。大變餘談に入つたが、此頃の川柳は未だノノ幼稚なものであつて、とてもお話にならなかつた。「牛肉屋皿一杯に引延ばし」(羽衣)　これは約四十年前の拙句だが、こんな句を作つて喜んで居たものだから全く情ない位だ。

○悔つて藝者合の手無して弾き（安永）

○三味線は出相なとこへ追ひやられ（明治）

○踊り子の饅に今来た三の絲

○中途から 仲居もつける越後獅子（明和）

皆さん何十年も米園で居ても夕マには其辺の料亭で酌婦

さんと言ふ便利な代物から勿體ない程な三味の音で？

誤魔化されたり小馬鹿にされたり乱調子でお茶を濁された

あげくニ拾弗位をボンと投出された鼻下六千六百

イヤ失敬された馬鹿話の想出がありはしませんかねー

傳手ですから

お座敷へ出かけを所です、トンビが鷹を産んだ、とも言ひ

ますか、左リ圍手の急げ翁てい奴ですな、今度け 助平

野郎の方へ一寸筆を延ばしますと、

○お座なりり 藝者調子を合せてる（文化）

○花の山御膳籠から三味を出一

(明治初)

○花乃中隣りの三味が呼びに來る

○花のふいつそ殺せぬ三下り

(年代不明)

仲々賑はしい三味線です。近頃でたら「サキソホン」や
デアイオリンと言ふ所から

○花見船 娘三味ごと抱へられ

○都々逸の三味がさへてる朧月

(明治初代)

三味線の樂的普及と保存に貢獻した藝者衆諸嬢の熱に無声
は称讃の辞を捧りたい。むげにも卑しい樂器だ。時代逢小
の音樂だなんて認識不足な代物に一喝を喰わせてやりたい
です。

○小待合 流しの三味が遠く消え

○長唄をうつとりと聞く者有可

○三味線の箱先へよこして落つかせ (安永)

○三味線乃後うら カラリ コロリなり (天明)

然し川柳は前にも云つた通り、こんな所に間誤つてゐたのだつたら、とつくに生命を失つて居る筈だが、大正昭和と時代が變つて來るに従つて、作句に対する柳人の心鏡も變化したことを見逃がしてはをらない。

そんなら作句の上にどう變つて來たかと云ふに、今迄は生活といふ事にはあまり多く念頭におかなかつたのが、妻子の生活は愚か、間誤ノへしてゐたら、自分自身の湖口の道へ立たない様になつて來た生活苦と云ふものは、昔々と自己の身邊を襲つて來てゐる。今日のんびりした様子を、氣持で十七文字を弄んでなんぞ居られないが至當である換言すれば、今迄の作句は單に客觀的であつて、其の中かにユーモアだとか、穿ちだとかいふ様なことを見出して、満足して居たが、社会の複雑化したのと同時に、生活苦裡に拱手して居られなくなつた時代の要求として、障靴搔痒

の感があつて、物足りなさを感ずる。

夫故に今後の作歌は、どこまでもこの域を脱して、自己の實感から生れて来た主觀的のものでなくてはならないと思ふ。尤も中には客觀的主觀句しかないが、明治時代から大正昭和を通じて表はれた幾多の作句を見れば、其跡が歴然として存在して居る。

今其實例を挙げて説明したら、もつとハッキリ讀者の判斷に訴へることが出来るが、生憎大等の文献は全部羅屑に残して来たので、一冊もない。参照資料の乏しい事をかならずむたりか大正末期の作かと思ふが、金花坊師の句で、よく柳人間に贈答されて居る「咳一つきこぬ中を大皇旗に」の如きは、川柳にして始めて云ひ得る近代の名句だと思ふ。次々に現れる新進作家能く時代を認識し、これに順應して来たが故に、現在柳壇の地盤を築き得たものと信ずる。

今日の川柳、時代に即應した川柳人として、其れ以上の
何物かを要求する、即ち新鮮味と風格、ローカルカラーと
が欲しいのでありまして、『俳川一如』の領域にまで追み
たいと念願して居るのです、ですから柳句するに必要であ
つた三條件にクラした古川柳や柳橋調を、近代柳人
間には余り歓迎されて居ません、早計にも狂句百年の悩
みとして型附けられる事になりましたが、それはどんな物か
と想うんです。

此人な意味で或る雑誌から抜萃した『川柳と三味線』
にからんだ柳句を参考として紹介して見ます。

時は春です、絢爛たる櫻、^{バツス}飲めやの花見時です。

○遊ばに 三味線亭を 売カニロひま (天保)

○弥生風 沖に三味線の音が揺れ

○三味線も 鼓もつゝも 掛道 (天明)



柳

三

味

線

無聲

何時頃のことでしたか。入所前に徳川末葉期に出来た

『芳原川柳記』^山と言ふ本を読んだことがある。其の遊女、カ

ムロ、帯間、ヤリテ婆々、廓藝者、流し、なまを主材に

た柳句を並べたもので其の時代に即した色々な事象が判然

りと浮んで来ます。

所入を了した徒然^{ツレズ}の人達にもお誂向きの面白い読物である

かも知れん、普通人は古り柳詞や、柳樽詞の三要素^{ウツカ}の

皮肉^{ヒコク}、可笑^{オカシ}味、を條件とし、誇張をしめて来た句を一

般的な又普遍的な川柳であるとは肯定され？ 今日に於ても

川柳するに、然くてならん物の如くに考へられて居ますか

去る十五年後第一第二両キヤンプの文藝同人の会合があつた。其の席上、第一キヤンプの方は谷無聲氏が音頭とりになつて、布目緑平氏を中心とする川柳吟社が設けられ、てゐるけれども、第二キヤンプには未だ其の機関が出来て居らぬので、私に其の肝煎役を務めよとの嚴命を受けた。

種々な仕事を持つて居る關係上、一應お断りいたしたものの、固執することもお出来ず、適任者を見出す迄お受けすることにした。こゝにはどの位の御人や、同好者が居られるか不明のため、其の組織も躊躇して居るから、どうぞ御希望の人々、御姓名と住所とを本社の文藝係か、又は直接私（二九、九、九）の方へ申込んで貰いたい。相當の人員に達したら、相談会を開き吟社の組織にかゝりたいと思ふ。なほ本題の件は未だ云ふべき事もあるが、規定の余日もないから他日に譲ることにした。（四二、一一、一七）